



ジャズギターの世界で実力、人気とも最高と誰しも語るのがジョー・パスである。ジャズギターについて何かを教わろうとしたら、まずこの人をおいて他にない。事実我々はそうしてきた。論理的にさすように語る。ジョー・パス、1923年1月13日、ペンシルヴァニア州ジョンズタウン生まれ、9歳のときからギターを手離したことがない。「ヴァーチュオーズ」と呼ばれ、名人としてうやまわれている昨今であるが、ご多聞にもれず、彼にもつらい日々があった。サンタモニカにあるシナノンでの10年間である。この時代の多くのジャズプレイヤーのメンタルなシクネスは語り草となっている。ジョーはジャンキーである自分を解放するためのこの10年間もギターを放さず、コンポを作って演奏していたという。まさにギターを杖代わりにした人生である。イバニーズとジョーとの関係もキャリアを重ねた。パイプをくねらせ、スリーピースをピシッと着こなしたミスター・パスからは想像つかないフランクなレイションを続けている。最高級コニャックの味わいともいわれる彼のインプロヴィゼーションがイバニーズから溢れ出すのをじっくりと味わうのは至上の喜びである。



JP20

ジョー・パスのギターを創ることは、世界中のギタークラフトマンの夢であるに違いない。JP-20は、イバニーズがジョー・パスの意向をもらさず形にかえた工芸品である。深く柔らかいサウンドのためのエポニーブリッジとテイルピース。ロングプレイに耐えうるボディウエイトとサイズ。スリムで薄めのネックと、あらゆるスケールをどんなポジションでも行える25 $\frac{1}{2}$ インチスケールのフィンガーボード。これらすべてがジョーのリクエストである。伝統だったヘッドのウラコブも除去した。ジョー・パスがイバニーズに望んだ最初の一言は「Light-weight!」だった。ウォームでディープなサウンドづくりのテーマとしては若干つらい要望がファーストリクエストだったのだ。せひ一度手にとって、体の一部としてすばりフィットする感覚をお確かめ下さい。ジョー・パスのような音が出ないじゃないか。というクレームにお応えする義務は一切無いものところえます。なぜかは十分ご承知のはずですから。

